

婦人と子ども

第十三卷第一號

幼稚園教育界の二大急務

簡易幼稚園の普及と保姆養成機關の必要

一、簡易幼稚園の普及

新らしき御代第二年の始に當つて、我が幼稚園教育界のことを思へば、忽ち念頭に浮び來る二大急務がある。簡易幼稚園の普及と、保姆養成機關の必要と、即ち此の二つである。

純教育上より觀たる幼稚園の職能の他に、社會上より觀たる其の職能は、時勢の進捗と共に次第に認められて來て居る。殊に近年社會的兒童問題の興起と共に、幼稚園も亦これと無關係に居るべ

き性質のものでないことは有識者の明かに唱道する處となつて居る。而して其の必要は一年々々と促されて居るのである。

時代の餘義なくする處、家庭は其の兒女の學齡前の教養を完ふする時間さへ減せられて居る。或は全く奪はれてさへ居るものが少くない。父は外に、母は内にとは幸福なる昔の子供のことであつた。今日に於ては、母も亦その愛兒を家に残して外に働かなければならぬものが多い。或はまた家にあるも、母としての最幸の任務、即ち我子のお

守りに餘念なき身となることを許されず。悪いとは知りながら子供を一人で遊ばせて置かなければならぬことになる。餘融ある上流中流の家庭を別にして、社會多數の一般生活に於ては、斯くの如きは普通の事實である。

かゝる事情の最も甚だしいのは夫婦して工場へ通ふ工業地の家庭である。家内中が農作に忙しい農村の家庭である。また表面上それ程に著しくはないとしても、せち辛い市街生活に於ても殆んど同じことである。而して此のすべての場所に、簡易幼稚園の普及の必要が起るのである。必ずしも無料幼稚園の慈善的恩恵に頼らうと願ふのではない。相當の保育料は勿論差出すから、一日なり半日なり親に代つて子供等を教養して下さる處があるらばとは、之等の家庭の切なる希望なのである。即ち茲にいふ簡易幼稚園とは、彼の細民の家庭のために設けられたる特殊慈善家の事業をいふもの

ではない。その必要大切は勿論言をまたぬ處であるが、それ程特殊ならざる普通の幼児教育場も、社會當然の必要である。

今日に於ては次第に其の弊を除かれつゝある様であるが、それでも尙ほ幼稚園は一種の贅澤なる教育機關の如く思はれて居ることがある。必要よりは贅澤のこの様に考へられて居ることがある。また斯ういふ考へは實際その兒女を幼稚園に通はせて居る家庭の方にもある。我子の爲に何の有益な意味があるのかは考へずに、たい世間體の誇りから幼稚園へ通はせて居るといふ風なもの未だ抑々ある。その流弊は幼稚園通ひに、「おんば日傘」の大業なみえなことが行はるゝようにもなる。更に此の要求に應ずる幼稚園の方では、徒に保育料を高くして、いよゝ其の贅澤機關たる特色を發揮する。かくて、教育普及を以て特色とする此の世紀に、幼稚園教育だけは富める家庭の獨占にな

ろうとする。しかも幼稚園教育はその社會的職能から言つて、富める人手の足りた家庭よりも富まざる人手不足の家庭に一層必要なるを思へば、甚だ遺憾なる矛盾といふべきである。

かゝる流弊の一面ともいふべきか、今日に於ては幼稚園は大都會だけのもの、様な観がある。勿論心ある人々によつて町立に私立に、大都市以外の幼稚園の設立されて居るものも無いではないがそれはまだ極く少數で例外の如く思はれて居る。いふ迄もなく、大都會に幼稚園の必要なる大いなる理由はある。益々その數を多くしなければならぬのであるが、同じく家庭の手を助けるといふ目的に於ては前述の通り、農村にも漁村にも小町村にも設けらるゝ必要があるのである。殊にそれ等の田園家庭に於ては大都會の家庭よりも家庭教育の注意が細心綿密を缺き易い。學齡前の大切なる一二年を棄て、おくのは教育上から見ても非常な

不經濟である。

教育上のあらゆる方面から考察して、茲に設備上理想的大幼稚園を建て得ることは愉快なことに相違ない。そういう理想的幼稚園もどし／＼出て來て貰はなければならぬ。しかし、前に述べて來た如き理由のもとに、設備はそれ程完全といかなくとも、兎に角適當な遊び相手もないとか、適當な遊び場所もないとかいふ子供達の爲に、簡易幼稚園の普及は、今日の時代の大きいなる要求である。而して此の簡易幼稚園を作り得る爲には、なるべく少い經費で出来る幼稚園の研究が直接の問題になる。狭い地面を最も都合よく用ゐ、少ない材料を巧に利用し、少い人數で上手に切り廻し得る工夫が何より肝要になる。そして其の結果は幼兒の家庭の負擔すべき保育料が輕くなつて、一般社會の普通家庭が、特別な心配なく其兒女を通

園させ得るようになるのである。また農村でも漁村でも、比較的容易に幼稚園を設け得るようになるのである。而して、全國のすべての學齡前幼兒が幼稚園教育を受くるといふ理想の時は一步步近づくのである。

素より粗製濫造は最も忌むべきことであるが、幸福を出来るだけ大勢の子供に頒ち度いのが簡易幼稚園の希望である。

二、保姆養成機關の必要

保育上の問題はいろいろある。しかし何が何でもあつても、究極する處は「人」の問題である。主義や議論や乃至設備で教育が出来るものではない。詰る處は保姆その人にあることである。假令は保育上の自由主義とか、自由遊戯とか言つても、それはよき保姆あつての後のことである。幼稚園教育の成功が一つに良保姆によることは多言を要し

ない。

然るに茲に實際上の一奇觀は、幼稚園保姆養成機關の甚だ不十分なことである。而してそれが敢て不思議とも思はれて居ないことである。

勿論、保姆養成機關の不十分なることに就ては種々實際上の理由もある。經費上、そこ迄手が届かないといへばそれ迄のことである。しかし、密に考察して見ると、保姆養成の爲の特別な機關がそれ程必要と感ぜられないのには、一つの意外な誤謬が基になつて居るようである。他なし、幼稚園教育は誰れにでも出来る。特別な素養も修業もいらぬといふ見解である。

しかし其の誤解たることは今更多く言ふを要しない。すべて無智は事を容易しく見るものであるが、幼稚園といふ學齡前の教育が、如何なる特別な智識と技能とを要するかといふことは、苟も幼稚園の何たるかを知る人には、最も明瞭なこと